

新年ご挨拶

誠に畏れ多きことながら、主神と共におられる明主様は、私どもの中で生きておられます。

その明主様が、ご昇天の前年の昭和29年6月15日、「メシヤ降誕仮祝典」を挙行されてより、今年で60年目を迎えます。

明主様は、その式典の10日程前の6月5日、脳溢血後の症状が続く中、当時の主だった資格者を熱海の碧雲荘に招集されました。

その折、明主様は、メシアが生まれたという事実の重大性とともに、ご自身を「まだ生まれたての赤ん坊」と仰り、ご自身が主神の子たる存在として新しくお生まれになったことに対する驚きと喜びのご心中を明かされました。

唯一の神・主神の創造のみ業すべてにわたって貫いているみ心は、主神がご自身の子をお生みになり、ご自身の永遠の命を授けることであります。

だからこそ、主神は、ご自身の創造をお始めになる時から、私どもを明主様と一つに結び、私どももご自身の子として新しく生まれさせるべく、霊肉一体の存在として養い育ててくださっていたのであります。

その明主様と共に、世界中の信徒が、輝かしい年の始めを、大いなる希望をもって迎えることができますことに感謝いたし、主神を心からお讃え申し上げたいと思います。

皆様には、明主様に結ばれた者として主神にお仕えする信仰を培うべく、日々励んでおられますこと、誠にありがたく思っております。

さて、現在の教団の趨勢の中で特筆すべきことは、海外において明主様を信ずる信徒が数多く生まれ、明主様、二代様ご在世時では成し得なかった段階、すなわち、日本の一宗教を越えた段階に至っているという事実であります。

今や百万を優に越える信徒が96カ国に在住し、日本国内の信徒数を遙かに上回っております。

私は、明主様の信徒が世界の隅々にまで満ち、今も増え続けている現状を思いますと、明主様という存在の偉大さを感じざるを得ません。

明主様のお説きになった神は、すべての源である唯一の神・主神であります。

その主神は永遠に生きておられ、その恵みは全人類、万物すべてに及んでおります。

この生きておられる主神の存在を、明主様は、浄霊を始め、自然農法・自然食、美による救い、また、聖地のご造営など、あらゆる手段と方法をもって私どもに気づかせようとしてくださいました。

そして今も、大きな愛をもって、私ども一人ひとりの中に存在する主神を認めることができるようにと、一生懸命お働きくださっております。

そうした、明主様のみ心が、二代様を通し、そして、世界各地を巡教された三代様を通して働かれたからこそ、国境を越え、民族や言語、文化や習慣などの違いを越えて、多くの信徒が世界の至る所に在住するという事実として現れているのではないのでしょうか。

私も、明主様のみ心とひとつにならせていただき、次代へと繋げるべく精進してまいりたいと思っております。

そして、私どもにとって忘れてはならないことは、多くの先達の方々が海を渡り、遠く異郷の地に赴き、逆境や挫折を乗り越えて、開拓布教に専心されたことであります。

昨年帰幽された渡辺前管長は、その中心となるお一人であり、世界布教の礎を築かれました。

いつのめ教団の前理事長でもある渡辺前管長は、いつのめ教団所属の海外信徒のことを、他の二教団の信徒に対しても、所属の違いを越えて、同じ明主様の信徒であると訴えられ、海外と日本の信徒とが分け隔てなく触れ合うよう促されました。

そして、毎年、①之光教団の信徒がいつのめ教団のアフリカ信徒のホームステイを受け入れ、互いに学び合い、実践に努め合うとともに、「海外信徒交流報告大会」が開催され、三教団からの参加者が一堂に会する中、私も出席させていただき、新鮮な気づきが生まれ、感動を覚えております。

私は、現在、日本国内国外共に、三つの教団がそれぞれの活動をそれぞれ異なったあり方で展開していることについて、大きな意義を見いだしております。

明主様は、三つの教団の信徒を一つとしてご覧になると同時に、どの教団の取り組みも大切にされ、それらすべてをご自身に結んで、私どもの至らないところを気づかせ、養い育ててくださっていると思うからであります。

何のために養い育ててくださっているのかと申しますと、それは、主神が明主様と共にある私どもを新しく生まれさせるためであります。

明主様のお歌に「国々の境はあれど日の本も外国人も同じ神の子」というお歌があります。

私どもは、主神から“お前はまことにわたしの子である、と呼ばれる者に

ならせていただく、すなわち、新しく生まれさせていただく、という希望をもって、世界中の明主様の信徒と共に、本年の新しく始まるご神業にお仕えしてまいりたいものであります。

おわりに、明主様に結ばれた私どもは、全人類とその父母先祖の方々と共に、そして、万物と共に、私どもの生みの親であり、育ての親でもある主神をお讃え申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

以 上